

看護師のクリニカルラダー

レベル		I	II	III	IV	V
レベル毎の定義		基本的な看護手順に従い必要に応じ助言を得て看護実践をする	標準的な看護計画に基づき自立して看護を実践する	ケアの受け手に合う個別的な看護を実践する	幅広い視野で予測的判断を持ち看護を実践する	より複雑な状況において、ケアの受け手にとっての最適な手段を選択し、QOLを高めるための看護を実践する
レベル毎の目標	行動目標	助言を得てケアの受け手や状況(場)のニーズをとらえる □助言を受けながらケアの受け手に必要な身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面から必要な情報収集ができる □ケアの受け手の状況から緊急度をとらえることができる	ケアの受け手や状況(場)のニーズを自らとらえる □自立してケアの受け手に必要な身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面から必要な情報収集ができる □得られた情報をもとに、ケアの受け手の全体像としての課題をとらえることができる	ケアの受け手や状況(場)の特性をふまえたニーズをとらえる □ケアの受け手に必要な身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面から個性を踏まえ必要な情報収集ができる □得られた情報から優先度の高いニーズをとらえることができる	ケアの受け手や状況(場)を統合しニーズを捉える □予測的な状況判断のもと身体的、精神的、社会的スピリチュアルな側面から必要な情報収集ができる □意図的に収集した情報を統合し、ニーズをとらえることができる	ケアの受け手や状況(場)の関連や意味をふまえてニーズをとらえる □複雑な状況を把握し、ケアの受け手を取り巻く多様な状況やニーズの情報収集ができる □ケアの受け手や周囲の人々の価値観に応じた判断ができる
	実践例	<ul style="list-style-type: none"> ■助言を受けながら、診療記録上の情報を確認し、患者の訴えや観察をもとに身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面から必要な情報収集をする。助言を受けながら患者の状態に合わせてバイタルサイン等の観察をし、基本的なフィジカルアセスメントを行う。また治療についての考え方等の情報を得る。 ■患者状況から緊急度をとらえ、助言を受けながら緊急度に応じた観察をし、必要な情報を得る。生命の危機にかかわる異常を発見できる。 ■助言を受けながら、自傷、自殺、他害、転倒、誤嚥、意識障害など、自分自身や他者に対して安全が保てない状況や緊急性のある状態を発見し、リーダーに報告できる。 ■自分が患者に対して個人的な感情を抱いたときに、他者に相談できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■自立して、入院時から診療録上の情報を確認し、患者の訴えや観察をもとに、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面から必要な情報収集ができる。例えば、身体的側面については、患者の状態に合わせたバイタルサイン等の観察をし、フィジカルアセスメントを行い、精神的な問題の裏に身体的要因が潜んでいないか多角的に考えることができる。 ■自傷・自殺・他害・転倒・誤嚥・意識障害などの緊急性のある状態を発見し、自立して対応できる。 ■患者のストレスについて理解することができる。 ■患者に対する自分の感情反応に気づくことができ、助言を得ながら適切に対処ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■診療録など決められた枠組みに沿った情報収集だけでなく個性を踏まえ、多職種からの情報も得て、患者にとって必要な情報収集を行う。例えば患者の発達段階の課題、防衛機制や回復段階、本人、家族の希望を踏まえ、退院調整に必要な情報を得ることができる。 ■正確なフィジカルアセスメントができる。例えば、患者から症状の訴えがあった場合、原因として患者の体内で起こっている現象を考えることができ、潜在する問題や予測される問題をあげることができる。 ■情報収集をもとに意図的なコミュニケーションを図り、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな側面のあらゆる情報から総合的に患者をとらえ、優先度の高いニーズをとらえる。 ■患者の状態に合わせて標準的な観察項目に関する観察ができるだけでなく、各項目に応じて観察項目を追加したり、異常値の出現時に対処できる。 ■患者の問題だけでなくストレスもとらえ、援助にいかすことができる。 ■看護の実践として自身の感情を適切にコントロールし表現する事ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者の疾患の予後や、退院後の生活等の予測的な状況判断のもと、必要な情報を収集する。患者に対し、疾患の予後と治療による影響は退院後の生活を予測した上で、患者の家庭での役割、仕事の内容、疾患に対する思い等を、意図的に焦点化し確認したうえで、収集した情報を統合してニーズをとらえることができる。 ■正確なフィジカルアセスメントだけでなく、患者の状況の原因までを予測しとらえることができる。 ■患者の問題だけでなく、ストレスもとらえ、ニーズを包括的に考えることができる。 ■患者の感情表出を促すコミュニケーションを実践し、QOLにかかわる思いを理解し、その思いの実現に向けた対応を見出すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■複眼的な視点から迅速に患者の状況をとらえ判断し、複雑な状況や多様なニーズをとらえ、必要な介入を判断できる。 ■地域全体を俯瞰して、ニーズに対して不足している機能に気づき、他施設等に働きかけることで解決を図る。 ■自分の意思を表すことが難しい患者に対しては、言葉の隔々や行動から本人の思いや人物像を読み取る。患者本人の尊厳を尊重するため、本人の気持ちに寄り添いながら意思確認をし、本人の気持ちを理解するために家族に話をして聞いて、支援していく。 ■複雑な状況を把握し、複眼的な視点から患者と家族を取り巻く複雑な状況について情報収集し、患者と家族の価値観とすり合わせ、多様なニーズをとらえる。
ニーズをとらえる力	実践例	<ul style="list-style-type: none"> ■助言を得ながら、安全な看護を実践する 	<ul style="list-style-type: none"> ■ケアの受け手や状況(場)に応じた看護を実践する 	<ul style="list-style-type: none"> ■ケアの受け手や状況(場)の特性をふまえた看護を実践する 	<ul style="list-style-type: none"> ■様々な技術を選択・応用し看護を実践する 	<ul style="list-style-type: none"> ■最新の知見を取り入れた創造的な看護を実践する
	行動目標	<ul style="list-style-type: none"> □指導を受けながら看護手順に沿ったケアが実施できる □指導を受けながら、ケアの受け手に基本的援助ができる □看護手順やガイドラインに沿って、基本的看護技術を用いて看護援助ができる 	<ul style="list-style-type: none"> □ケアの受け手の個性を考慮しつつ標準的な看護計画に基づきケアを実践できる □ケアの受け手に対してケアを実践する際に必要な情報を得ることができる □ケアの受け手の状況に応じた援助ができる 	<ul style="list-style-type: none"> □ケアの受け手の個性に合わせて、適切なケアを実践できる □ケアの受け手の顕在的・潜在的ニーズを察知しケアの方法に工夫ができる □ケアの受け手の個性をとらえ、看護実践に反映ができる 	<ul style="list-style-type: none"> □ケアの受け手の顕在的・潜在的なニーズに応えるため、幅広い選択肢の中から適切なケアを実践できる □幅広い視野でケアの受け手をとらえ、起こりうる課題や問題に対して予測的および予防的に看護実践ができる 	<ul style="list-style-type: none"> □ケアの受け手の複雑なニーズに対応するためあらゆる知見(看護および看護以外の分野)を動員し、ケアを実践・評価・追求できる □複雑な問題をアセスメントし、最適な看護を選択できる
ケアする力	実践例	<ul style="list-style-type: none"> ■指導を受けながら、患者に対して手順に沿ったケアを実施する。患者の状態に合わせてコミュニケーション技術を選択し、実施するケアについて十分説明し、患者の理解が得られるようにする。 ■患者に対して基本的な生活行動の援助を行う。重症患者や医療依存度の高い患者については、指導を受けて実践する。 ■基本的看護技術については、新人看護職員研修ガイドラインにおける、看護技術についての到達目標が達成できる。 ■急変時には、対応の場において流れを把握し、指示を受けながらメモをとる、バイタルサインを確認するなど、実践できる。 ■指導を受けながら、行動制限に関する指示を理解し、安全と人権への配慮を考慮して行動制限を実施できるよう物品・環境を整える事ができる。 ■精神科病院で起こりやすい事故について知ることができる。 ■危険な状況においては、危険を察知し、身を守り報告できる ■デイケア、作業療法、訪問看護等に参加し、それぞれの特徴や意味について理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者の既往歴・年齢・性別・社会的役割を考慮し、標準的な看護計画に追加・変更をし、自立してケアを実践できる。 ■患者に対しケアを実践する際に必要な情報を得て、状況に応じた看護を実践する。例えば混乱や抵抗がある患者や日常生活能力の低下が著しい患者に対し安全にケアが実践できる。 ■患者に対して指導をする場合、一般的な内容について網羅して説明することができる。 ■患者の状況や場面に合わせたコミュニケーション技術を選択し、使うことができる。例えば、本人のペースに合わせ、感情に働きかけ説明することができる。 ■行動制限を受ける患者に対し、安全な環境の提供・必要なケアを考え実施できる。 ■急変時に、指示されたケアを責任もって実践できる。 ■危険な状況下で応援を呼ぶことができる。 ■精神科で起こりやすい事故防止に向けた環境を整えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者の個性に合わせて適切なケアを行う。例えば、混乱や抵抗がある患者や日常生活能力が著しい疾患・終末期の患者に対して、優先順位を正しく判断し、安全・安楽にケアができる。 ■患者に対して指導する場合、患者の生活習慣や価値観、希望などを考慮して説明することができる。 ■患者の全体像より、生活習慣、価値観、その人らしい生活を大切に考慮して、尊厳をもって対応する。コミュニケーションスキルを活用する。 ■行動制限最小化に向けて取り組むことができる。 ■急変時には落ち着いて対応し、家族に配慮することができる。 ■患者の不調や危機的な状況について、その出来事と、そのときの精神症状を整理し、患者が可能な対応について患者とともに見出すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者の顕在的・潜在的ニーズに応えるために、患者に対し、疾患の予後と治療による影響と、患者の生活を考慮し幅広い選択肢の中から適切なケアを提案・実践する。 ■患者に対して指導をする場合、予測的な視野を持ちながら、患者の反応に応じて段階的に説明することができる。 ■急変時には、原因や今後の展開を予測しながら、患者および家族への対応と今後への準備ができる。 ■患者の家族に、患者の混乱・不安・苦しみを理解してもらえよう働きかけ、また、関係性が維持できるよう患者、家族へ介入することができる。 ■困難事例について、多職種を交えて検討していくことができる。 ■危険な状況における対処方法について指導することができる。 ■行動制限や処遇について、法や倫理の観点から適切性を査定し、多職種とディスカッションしながら変更の提案ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■どのような複雑な背景や状況にあっても、最適なケアをすることができ、スタッフに指導ができる。 ■コミュニケーションに長けており、各患者に最適な対応ができる。 ■先進的なケアや処置、機器等の管理方法、最新の疾患に対する知識や技術等を取得し、ケアに活かすことができ、スタッフへの指導もできる。 ■患者の複雑なニーズに対応するため、あらゆる知見を用い、患者の希望や価値観、尊厳を尊重し、患者のQOLや生活の可能性を広げるケアを考え、実践することができる。 ■急変時には、複雑な病態の患者においても、原因や今後の展開を予測しながら、患者および家族への対応と今後への準備ができる。

看護師のクリニカルラダー

患者;患者・利用者とする

家族;家族と患者を取り巻く人々とする

レベル	I	II	III	IV	V
レベル毎の定義	基本的な看護手順に従い必要に応じ助言を得て看護実践をする	標準的な看護計画に基づき自立して看護を実践する	ケアの受け手となる個別な看護を実践する	幅広い視野で予測的判断を持ち看護を実践する	より複雑な状況において、ケアの受け手にとっての最適な手段を選択し、QOLを高めるための看護を実践する
協働する力	<p>レベル毎の目標</p> <p>関係者と情報共有できる</p> <p>行動目標</p> <ul style="list-style-type: none"> □助言を受けながらケアの受け手を看護していくために必要な情報が何かを考え、その情報を関係者と共有することができる □助言を受けながらチームの一員としての役割を理解できる □助言を受けながらケアに必要と判断した情報を関係者から収集することができる □ケアの受け手を取り巻く関係者の多様な価値観を理解できる □連絡・報告・相談が出来る 	<p>看護の展開に必要な関係者を特定し、情報交換ができる</p> <p>□ケアの受け手を取り巻く関係者の立場や役割の違いを理解したうえで、それぞれと積極的に情報交換ができる</p> <p>□関係者と密にコミュニケーションを取ることができる</p> <p>□看護の展開に必要な関係者を特定できる</p> <p>□看護の方向性や関係者の状況を把握し、情報交換できる</p>	<p>ケアの受け手やその関係者、多職種と連携ができる</p> <p>□ケアの受け手の個別的なニーズに対応するために、その関係者と協力し合いながら多職種連携を進めていくことができる</p> <p>□ケアの受け手とケアについて意見交換できる。</p> <p>□積極的に多職種に働きかけ、協力を求めることができる</p>	<p>ケアの受け手を取り巻く多職種の力を調整し連携できる</p> <p>□ケアの受け手がおかれている状況(場)を広くとらえ、結果を予測しながら多職種連携の必要性を見極め、主体的に多職種と協力し合うことができる</p> <p>□多職種間の連携が機能するように調整できる</p> <p>□多職種の活力を維持・向上させる関わりができる</p>	<p>ケアの受け手の複雑なニーズに対応できるように、他職種の力を引き出し連携に活かす</p> <p>□複雑な状況(場)の中で見えにくくなっているケアの受け手のニーズに適切に対応するために、自律的な判断のもと関係者に積極的に働きかけることができる</p> <p>□多職種連携が十分に機能するよう、その調整的役割を担うことができる</p> <p>□関係者、多職種間の中心的役割を担うことができる</p> <p>□目標に向かい多職種の活力を引き出すことができる</p>
	実践例	<ul style="list-style-type: none"> ■看護チームの一員であることを意識し、日々の患者へのケアを他の看護師と協働して行う。常に自らのもつ情報を他の看護師に連絡し、患者の状態について報告し、判断できないことや経験のない処置やケアについて、他スタッフに相談する。 ■多職種(医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、作業療法士、精神保健福祉士、介護福祉士、放射線技師など)の役割を理解する。 ■カンファレンスに参加し、発言することで、自らのもつ情報を提供して関係者と共有する。 ■患者の退院に向けて必要な社会資源について、他のスタッフに相談することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者に関わる多職種の役割を理解し、必要に応じて多職種の協力の必要性に気づく。 ■患者の疾患の現状、検査結果、治療方針を担当医と確認し、患者の訴えや受け止めている思いを医師に伝える。看護チームに情報共有し、看護の方針を確認できる。 ■カンファレンスに参加し、積極的に発言することで、患者の思いや希望等の必要な情報を関係者と共有できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者の個別的なニーズに対応するため、関係者と協力して多職種連携を進める。患者の現在ある状況をとらえ、必要な職種がわかり、協力を求めることができ、調整ができる。 ■入院時から、退院後の生活場所(在宅、回復期リハビリ病棟、高齢者介護施設等)について、多職種に提案する等の調整を行う。 ■協働する看護師に積極的に情報共有する。治療方針や検査結果、ケアの内容を多職種で共有し意見を聞くことができる。定期的なカンファレンスだけでなく、必要なタイミングを見極めてカンファレンスを開催する。患者や家族が治療に協力できる工夫を行うために、カンファレンスに参加できるように働きかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ■診療報酬などの社会制度も理解した上での調整ができる。 ■多職種との連携において、病院内だけでなく病院外との調整もできる。退院支援において、患者の退院後の生活を予測した上で、主体的に関係機関との連絡調整ができる。 ■多職種連携においては、各職種が役割を効果的に発揮できるように、各職種間の役割を明確化し、患者にかかわることができるような連携を促進する。 ■カンファレンスにおいてはファシリテートすることができる。 ■患者に対し起こりうる課題を予測し、専門家のかかわりを提案、調整できる。
意思決定を支える力	<p>レベル毎の目標</p> <p>ケアの受け手や周囲の人々の意向を知る</p> <p>行動目標</p> <ul style="list-style-type: none"> □助言を受けながらケアの受け手や周囲の人々の思いや考え、希望を知ることができる □確認した思いや考え、希望をケアに関連づけることができる 	<p>ケアの受け手や周囲の人々の意向を看護に活かすことができる</p> <p>□ケアの受け手や周囲の人々の思いや考え、希望を意図的に確認することができる</p> <p>□確認した思いや考え、希望をケアに関連づけることができる</p> <p>□現実検討能力が向上する働きかけができる。</p>	<p>ケアの受け手や周囲の人々に意思決定に必要な情報提供や場の設定ができる</p> <p>□ケアの受け手や周囲の人々の意思決定に必要な情報を提供できる</p> <p>□ケアの受け手や周囲の人々の意向の違いが理解できる</p> <p>□ケアの受け手や周囲の人々の意向の違いを多職種に代弁できる</p>	<p>ケアの受け手や周囲の人々の意思決定に伴うゆらぎを共有でき、選択を尊重できる</p> <p>□ケアの受け手や周囲の人々の意思決定プロセスに看護職の立場で参加し、適切な看護ケアを実践できる</p>	<p>複雑な意思決定プロセスにおいて、多職種も含めた調整的役割を担うことができる</p> <p>□適切な資源を積極的に活用し、ケアの受け手や周囲の人々の意思決定プロセスを支援できる</p> <p>□法的および文化的配慮など多方面からケアの受け手や周囲の人々を擁護した意思決定プロセスを支援できる</p>
	実践例	<ul style="list-style-type: none"> ■助言を受けながら、患者や家族の思いや考え、希望を知る。 ■患者や家族の思いや考え、希望をリーダー看護師や該当する職種に伝えることができる。 ■行動制限中の患者に対しては患者の不安や苦痛の程度を知り和らげる関わりができる。 ■助言を受けながら患者の現実検討能力の状態をアセスメントできる。 ■アドボカシーの概念を知っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者や家族の思いや考え・受け止め方など、意図的に確認することができる。そして、本人の感じている生活のしづらさや不安を傾聴し、本人と共に生活障害を補う具体的な工夫を模索できる。 ■患者や家族の思いや考え、希望をケアに関連づけ、ケアに反映させることができる。 ■現実検討能力が向上する働きかけができる。 ■行動制限を解除(最小化)するため、具体的な行動目標を患者に説明できる。 ■アドボカシーとして、看護師の役割と医療者の認識とのずれに気づき、追加の説明等調整できる。 ■アドボカシーにおいて、看護師の役割を理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者や家族の意思決定に必要な情報を提供する。例えば、療養の場や治療・検査について、選択肢の特徴が説明でき、患者や家族に提案するなどして意思決定を支える。 ■自己決定した内容を支持し、多職種に代弁者として、患者や家族の思いを伝えることができる。 ■行動制限中の患者においては、人権に配慮して患者のニーズに応えられるように、チームへの働きかけができる。 ■アドボカシーとして、看護師の役割を患者へ説明し、患者が医療者と協働して自己決定できるように支援することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■患者や家族の気持ちを引き出したり、意思決定のプロセスを促進し、自ら考えたり決定できたりすることができるよう、様々な案を提示し積極的に関わることができる。 ■患者や家族、医療スタッフの意向が異なる場合においては、意向の違いの原因をとらえ、カンファレンスを開催し調整する。 ■複雑な意思決定場面において、患者や家族を尊重し寄り添い続けることができる。 ■患者や家族の意思決定にかかわる揺らぎに寄り添い、支えることができる。 ■問題の指摘や情報の提供の中で、そのメリットやデメリットを提供でき、アドボカシーとして多職種との連携を調整する。

アドボカシー;権利と擁護

看護師のクリニカルラダー

患者;患者・利用者とする

家族;家族と患者を取り巻く人々とする

レベル	I	II	III	IV	V	
レベル毎の定義	基本的な看護手順に従い必要に応じ助言を得て看護実践をする	標準的な看護計画に基づき自立して看護を実践する	ケアの受け手となる個別な看護を実践する	幅広い視野で予測的判断を持ち看護を実践する	より複雑な状況において、ケアの受け手にとっての最適な手段を選択し、QOLを高めるための看護を実践する	
関係性を構築する	レベル毎の目標	助言を受けながらケアの受け手との関係性を作ることができる	自立してケアの受け手との関係性を作ることができる	ケアの受け手に合わせて関係性を作ることができる	幅広い視野で予測的判断を持ちケアの受け手との関係性を作ることができる	より複雑な状況においても、ケアの受け手との関係性を作ることができる
	行動目標	□助言を受けながらケアの受け手に関心に向け、ケアの受け手の視線や表情、雰囲気、態度から相手の思いを察知し、工夫しながら関係性をつくること ことができる。	□受容的、支持的な態度でかかわり、対象者から信頼してもらえる関係性をつくること ができる。	□患者の対人関係能力が高められるよう、個別的な かかわりができる。	□複雑な状況下にある対象者らと、相互にゴールを共有し、協働を意識した関係性を築くこと ができる。	□より複雑な状況下にある対象者らと、自律に向けた関係性を深めること ができる。
	実践例	■助言を受けながら普段の関わりの場面から患者のペースを尊重し脅かされずに一緒に過ごすこと ができる。 ■患者の訴えを否定せずに聴き、患者の体験を理解しながらあるがままを受け入れること ができる ■助言を受けながら看護職の倫理行動について理解し患者の権利を尊重した看護の必要性を理解 できる。	■患者と患者をとりまく人々に関心を示し続け、その背景や状況をふまえ、両者を尊重しつつ、看護職として何とかしたいという思いで関わる ことができる。 ■患者の年齢や状況、疾患の特徴に応じて、かかわるタイミングをはかり、患者を尊重して対話 ができる。 ■倫理的視点を意識して看護実践できる。また、看護場面において、倫理的なジレンマに気づき、それを言語化し、相談 できる。	■患者と患者をとりまく人々のできていることや、わずかな変化に気づくこと ができる。 ■対象者に肯定的にフィードバックをしたり、意図的に気にかけていることなどを伝えること ができる。 ■看護職自身が感情や行動を振り返る機会をもち、分け隔てなくかかわること ができる。 ■看護場面での倫理的ジレンマや問題に対して常にアンテナを立て、察知したこととその理由を言語化し、他者と共有、意見交換すること ができる。	■複雑な状況下にある患者と患者をとりまく人々のために何かできないかを常に考えながら、相互に目標を共有し、実施・評価する際に対象者らの参加を促し、かかわりを続けること ができる。 ■どのような状況であろうとも、対象者自身の気持ちや困っていることを表出できるように、根気強くかかわること ができる。 ■表出されたことについて意見を交わし、相互に理解することができる。 ■些細と思える倫理的問題に対しても、それを顕在化し、互いの価値観を尊重しながら、十分話し合い、チームで合意形成すること ができる。	■より複雑な状況下にある患者と患者をとりまく人々との関係形成のプロセスをアセスメントし、患者と看護職の相互作用によって自律に向けた関係性を築きかかわりを続けること ができる。 ■患者の状態をみながら段階的にアプローチし、患者が自己を理解し、自己決定できるようにかかわること ができる。 ■倫理的問題に対してリーダーシップを発揮して解決に向けた行動ができる。メンバーに対して、倫理的課題解決のための指導・支援が できる。

2022年12月改訂